




学位論文審査の結果の要旨

審査区分 (課)・論	第468号	氏名	王 育 梅
審 査 委 員 会 委 員		主査氏名	熊本俊秀 
		副査氏名	藤木 穂 
		副査氏名	上野徳美 
<p>論文題名 Type A behavior pattern and hyperthymic temperament: Possible association with bipolar IV disorder (タイプA行動パターンと発揚気質：双極IV型障害との関連の可能性について)</p> <p>論文掲載誌名 Journal of Affective Disorders 2011;133:22-28.</p> <p>論文要旨 近年、タイプA行動パターン (TABP) は、抑うつや双極性障害と関係があることが報告されている。双極性障害のうち、循環気質者に生じるうつ病 (双極II 1/2型障害) と発揚気質者に生じるうつ病 (双極IV型障害) は、躁病や軽躁のエピソードがなくても、広義の双極性障害に属するとの報告がある。この発揚気質者は生まれつき精力的で、向上心が強く、TABPの傾向を有するのではないかと仮説の下に、両者の相関について検討した。健常な医療スタッフ、医学生及びその他の業務従事者50人について精神疾患簡易構造化面接法 (MINI)、17-項目Hamiltonうつ評価尺度 (HAMD-17)、Young躁病評価尺度 (YMRS)、Bortner自己評価尺度、TEMPS-A日本語版を用い、精神疾患の有無、TABP、発揚気質を評価した。さらにアクチグラムによる睡眠時間、日常活動量、活動時の照度、また、神経内分泌負荷試験による中枢セロトニン神経機能を評価し、血中脳由来神経栄養因子 (BDNF) を測定した。</p> <p>その結果、段階的重回帰分析では、発揚気質スコアはTABPスコアと正の相関を示し、睡眠時間及び覚醒から離床までの時間は負の相関を示した。血中のBDNFレベルはTABPスコアとは相関しなかった。</p> <p>以上の結果から、発揚気質者はTABPの傾向を有し、TABP者は睡眠時間が短く、覚醒後に素早く離床すると思われた。TABPと双極性障害との相関についてはさらなる検討が必要であるが、本研究の結果は、双極IV型障害に関連する発揚気質は、さらにTABPと関連があることを明らかに示したものである。TABPは心臓血管障害危険因子として考えられているが、このTABPと双極IV型障害と関連があることは、双極性障害では心臓血管障害による死亡率が高いというよく知られている事象の説明になるかもしれない。</p> <p>本研究は、TABPは発揚気質と相関があることを明らかにし、双極IV型障害と関連がある可能性を示唆した点において意義のある研究であり、審査員の合議により学位論文に値するものと判断した。</p>			

学 位 論 文 要 旨

氏名 王 育梅

論 文 題 目

Type A behavior pattern and hyperthymic temperament: Possible association with bipolar IV disorder (タイプ A 行動パターンと発揚気質：双極 IV 型障害との関連の可能性について)

要 旨

目的：タイプ A 行動パターンは時間的切迫性、達成努力性、攻撃-敵意性の3つの要素から構成され、精力的で向上心が高く、働きすぎの傾向にあるとされる。これまでの研究ではタイプ A 行動パターンと心血管疾患の関連性が報告されている。最近では、タイプ A 行動パターンとうつ病や双極性障害の関連を示した報告がある。Akiskal や Pinto によると、双極性障害の2つの亜型すなわち循環気質者に生じるうつ病（双極 II ½型障害）と発揚気質者に生じるうつ病（双極 IV 型障害）は躁病エピソードや軽躁エピソードがなくとも、広い意味での双極性障害（双極スペクトラム）に属する。この発揚気質は生来、精力的で、向上心が強く、タイプ A 行動パターンとの類似性を有する。今回の研究では、発揚気質を有する者がタイプ A 行動パターンを取りやすいという仮説を立て、これを検討することが目的である。

方法：健常被験者 50 人に対象に Mini International Neuropsychiatric Interview (MINI)、ハミルトンうつ病評価尺度やヤング躁病評価尺度を施行して精神疾患の既往や現在症のないことを確認した。タイ

タイプA行動パターンを評価する為に Bortner 自己評価尺度を用い、発揚気質の評価には TEMPS-A 日本語版を使用した。さらに、アクチグラムを非利き手に1週間装着させて睡眠時間、日常活動量と活動時の照度についての評価を行った。また、神経内分泌的負荷試験により中枢セロトニン神経機能の推定を行い、血中 Brain-derived neurotrophic factor (BDNF)も測定した。

結果:タイプA行動パターンの得点を従属変数とし、その他の要因を独立変数として Stepwise 回帰分析を行ったところ、タイプA行動パターンの得点と発揚気質の得点は有意な正の相関を示した。また、睡眠時間と覚醒から離床までの時間(snooze time)はタイプA行動パターンの得点と有意な負の相関を示した。血中 BDNF はタイプA行動パターンの得点と有意な相関を認めなかった。

考察:本研究の結果から発揚気質者はタイプA行動パターンを有する傾向があり、さらにタイプA行動パターンを有する者は睡眠時間が短い、snooze time が短いという特徴を有していた。タイプA行動パターンの人が過労に陥り、うつ病を発症した場合には、その背景に発揚気質の存在が想定されるために、単極性うつ病として抗うつ薬を投与するよりは、双極Ⅳ型障害として気分安定薬を投与した方が良いかもしれない。また、タイプA行動パターンは心血管疾患の一つのリスクとして考えられているため、タイプA行動パターンと双極Ⅳ型障害との関連は双極性障害患者の心血管疾患の死亡率の高さを説明できるかもしれない。今後、このような視点から、さらに研究を進める必要がある。